

第56回愛知県総合教育センター研究発表会
テーマ「学校の力、教師の力を高める」
平成28年11月29日（火） 愛知県総合教育センター

第56回愛知県総合教育センター研究発表会を、「学校の力、教師の力を高める」（3年次）というテーマの下で、愛知県教育委員会松本真理子教育委員をはじめ、多数の来賓及び県内外から500人を超える参加者を迎え、開催した。以下にこれらの概要を紹介する。

1 開会行事次第

- ・開会のことば
- ・所長挨拶
- ・愛知県教育委員会挨拶
- ・来賓紹介
- ・基調提案
- ・閉会のことば

2 講演

- ◆演題 「学習指導要領改訂の方向性 ―アクティブ・ラーニングの視点による不断の授業改善―
- ◆講師 文部科学省初等中等教育局 視学官
田村学氏

3 研究発表・研究協議

次の各研究について発表と協議を行った。なお、各研究の詳細い内容については、当ウェブページ「研究紀要第106集（平成29年4月3日掲載予定）」を御覧ください。

◇第1部会 ミドルリーダーの育成（小中高特）

協働共育型ミドルリーダーの育成に関する研究

【発表の概要】

「教育研究リーダー養成研修」修了者7人を代表委員、所属校を研究協力校とし、代表委員が協力校における教育実践上の課題を見だし、管理職や若手教員、同僚教員との協働により、課題解決を図るとともに、学校としての組織力を向上させる過程を記録・分析し、「協働共育型ミドルリーダー」への成長サイクル、協働共育型ミドルリーダーへの成長を支える要素について報告した。また、協働共育型ミドルリーダーの育成指標として「段階的到達目標」、中堅教員が自己の成長の度合いを客観的に判断したり、課題把握したりするためのツールとして「自己分析シート」について提案した。

代表委員（西成東小、桜町小、東部中、安城北中、千種高、足助高、千種豊学校）によるパネルディスカッションでは、ミドルリーダーを中心とした学校組織モデル図を基に、取組の具体と成果、課題について発表した。その後、同じ立場（役職）の参加者同士3人が小グループを編成し、「学校を活性化させるため、校内で協働共育型ミドルリーダーが育つためには」をテーマとし、課題とその解決策について研究協議を行った。前半では、参加者の所属校におけるミドルリーダーを中心とした相関図を作成し、協働体制を構築する上での課題について協議した。後半では、校内でミドルリーダーが育つ上での課題と、その解決策について協議した。管理職、ミドルリーダー、若手・同僚という縦の関係に加え、ミドルリーダー相互の関係、若手や同僚間等の横の関係を構築することが求められるので、「情報の共有」「意識や役割の明確化」「協働体制の構築」等が重要になるとの意見などが出された。

◇第2部会 評価手法（高特）

多様な学習成果の評価手法に関する研究

【発表の概要】

文部科学省の委託を受けて平成25年度から平成27年度までに行った「多様な学習成果の評価手法に

関する調査研究」事業の研究成果を基に、本年度行っている所内研究についての報告を行った。

最初に全体会を行い、研究の概要として、「教育課程に関する現状と今後の動き」「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究の実践の考察」「教科指導の研修プログラムの開発」「小冊子の作成」について説明をした。その後、「地理歴史、公民」「数学」「英語」の分科会に分かれて、教科ごとに「パフォーマンス課題を導入した単元構想について」をテーマに研究協議を行った。

「地理歴史、公民」分科会では、「授業構想の在り方」「学習評価の在り方」について説明した後に4～5人のグループに分かれ、単元構想の作成について「テーマ」「目標」「手だてと工夫」「評価基準」という章立てに基づき協議した。「ALの手法について考えるいろいろなアイデアをもらった」「授業の組み立てについて考え直すよいきっかけになった」などの意見が出された。

「数学」分科会では、「単元計画書を利用した教科指導のPDCAサイクルの確立」について説明した後に4～5人のグループに分かれ、「課題学習の作成」について協議した。「さまざまなアイデアを知ることができた」「他校の先生の取組が大変参考になった」などの意見が出された。

「英語」分科会では、「教科指導研修の内容」「次期学習指導要領に向けた動き」「単元構想の在り方」の説明をした後に4人のグループに分かれ、「単元構想の作成」というテーマでCAN-DOリストに基づいた単元計画（指導と評価）の作成について協議した。「実際の単元目標や評価方法を考えるという実践的なワークショップで勉強になった」「一人で考えていては思いつかないアイデアが他の先生から出されて、組織で教科指導を行う意義を感じた」などの意見が出された。

◇第3部会 情報モラル（小中高特）

児童生徒の情報モラルの指導法に関する調査研究

－児童生徒の実態と情報モラル指導の在り方－

【発表の概要】

児童生徒の情報機器利用の実態調査の報告と情報モラルの指導の在り方について発表を行った。

平成27年度に実施した実態調査の結果については、「携帯端末の所有の低年齢化」「長時間の情報機器やインターネットの利用」「情報機器・サービスの多様化」「危険性や情報の特性に対する理解不足」「情報機器利用の影響」「家庭との協力の必要性」という六つの傾向について報告した。

情報モラルの指導の在り方については、文部科学省などから発行されている関連する資料等も活用し、情報モラル教育の目標や指導の進め方について確認した。また、全ての教員が指導することの重要性和、効果的に情報モラル教育を行う指導方法を提案した。さらに、対象者や指導内容、役割分担、指導理由などを踏まえて計画的に指導ができるように、情報モラル年間指導計画例を提示した。

その後の分科会は学校種ごとに分かれ（1グループ6人～23人）、研究協力委員による情報モラルに関する授業実践についての報告を行った。情報技術の発展による新しい課題に対応できる判断力を身に付けさせることができるように、児童生徒が主体的に考える学習活動を含む効果的な授業実践を報告した。そして、それぞれの学校種における効果的な情報モラルの指導の在り方について研究協議を行った。小学校部会では、保護者や教職員に対する情報モラル教育の研修等の在り方について協議した。中学校部会では、情報モラルに関する問題事例と年間指導計画の在り方について協議した。高等学校部会では、生徒の情報機器利用の実態や情報モラルの指導の難しさを共有した。

◇第4部会 特別支援教育（小中高特）

障害の特性に応じた指導・支援の在り方に関する研究

－特別支援学校のセンター的機能を活用した小・中学校における特別支援教育の推進－

【発表の概要】

全体会では、平成26年度に小・中学校の特別支援教育コーディネーターを対象に行ったアンケート結果や特別支援教育の動向を踏まえ、特別支援学校のセンター的機能の活用に着目した経緯について発表した。また、平成27・28年度における研究協力校のセンター的機能を活用した実践を通して、研究の成果とともに、有効な支援方法や特別支援教育の充実に向けた取組について提案した。さらに、平成26・27年度愛知県教育委員会研究委嘱校（みあい特別支援学校、佐織特別支援学校、三好特別支援学校）における、地域の小・中学校に対するセンター的機能を活用した地域全体で取り組む特別支援教育の実

践について発表した。

分科会では、研究を通して着目した「支援シートの活用」「個に応じた支援」「地域との連携」というテーマごとに分かれ、研究協力校の実践発表と、テーマの内容を中心とした研究協議を行った。

「支援シートの活用」について協議した分科会では、支援シートを作成することで、「児童生徒の実態や保護者の思いなどを整理できる」「関係者で情報を共有するのに有効である」など、活用について前向きな意見が出された。高等学校における意見では、支援シートを活用して校内の共通理解を図ることや、特別支援学校との連携の必要性が話題となった。

「個に応じた支援」について協議した分科会では、「個人と環境との相互作用」「ポジティブな支援」「行動の意味を探る」「学級全体での支援」などのキーワードを示しながら協議を進めた。また、仮想事例を挙げ、問題行動に対して考えられる原因や具体的な支援方法を協議した。

「地域との連携」について協議した分科会では、特別支援学校が開催する研修会等への参加の現状や巡回相談の状況などを話題にした。また、支援対象となる児童生徒の情報について、支援シートの活用や情報の共有等、小・中学校と特別支援学校双方の立場から意見を交わした。

◇第5部会 国語科指導法（高特）

論理的思考力を育む国語科指導法に関する研究

【発表の概要】

初めに基調報告を行い、その後、研究協力委員による実践事例の報告及びグループ協議を行った。

基調報告では、PISA調査や全国学力・学習状況調査から窺える課題と、次期学習指導要領の目指す方向性を見据え、高等学校国語科における論理的思考力の育成の必要性を述べた。論理的思考力についての分析及び考察、教育技法の検討を踏まえて、生徒の主體的・協働的な学習活動を軸とする授業を実践したこと、実践結果の検討を通して、効果的な指導法及び妥当性・信頼性の高い評価方法の開発を試み、一定の成果を得たことが報告された。

実践事例の報告は、「読むこと」「話すこと・聞くこと」「書くこと」の各領域における授業と評価の工夫について、5人の研究協力委員（旭野高等学校、日進西高等学校、一宮南高等学校、豊田西高等学校、岡崎西高等学校）が行った。このうち、日進西高等学校の実践事例については、改善案を考えるグループ協議を行い、今後の国語科指導法のヒントとなる、多様な視点からの示唆を得ることができた。

各実践事例の報告及びグループ協議の概要は以下のとおりである。

事例報告1では、古典B（古文）において、「比較の軸」を設定して古典作品を読み比べることにより、論理的に考え、深く読解する力を育む取組が報告された。事例報告2では、古典B（漢文）において、文相互の関係性や文章の論理構造について考え、説明し合うことにより、主體的に読む姿勢を育てる学習活動の取組が報告された。事例報告3では、現代文B（小説）において、指導者の設定した問いに沿って小説の続編を創作し、発表することにより、自分の考えを分かりやすく話す力を育成する実践が報告された。事例報告4では、現代文Bにおいて、グラフや数値等の非連続型テキストを組み合わせて用い、自分の考えを正確に、説得力をもって相手に伝える力の育成を目指した取組が報告された。

グループ協議では、「水の東西」の授業において、根拠と主張を適切に組み合わせる力の育成を目指すための方策をグループで話し合った。改善案をホワイトシートに書き、ボードに貼り付け、全体で共有した上で、研究協力委員がファシリテーターとなって改善案を分類し、参加者との対話を通してまとめの発表を行った。参加者からは、多様な授業構想のアイデアを得ることができたという感想が多く寄せられた。

◇第6部会 理科の評価手法（高特）

高校理科におけるパフォーマンス課題とその評価に関する研究

【発表の概要】

最初に基調提案を行い、その後、化学・物理・生物分野の授業について実践研究の成果を報告し、最後にグループ協議を行った。

実践研究の成果報告では、まず、化学分野で、一宮西高等学校教諭が「現象に対する論理的思考力と表現力の向上を目指した授業実践」というテーマで、濃度の異なる水溶液を用いて溶液の密度について

考えさせるパフォーマンス課題とルーブリックを用いた評価を、生徒の実態が異なる2校で実践した結果について報告した。

次に、物理分野で、高蔵寺高等学校教諭が「決まった手順のないパフォーマンス課題の実践事例と評価のポイントについて」というテーマで、さまざまな学校、学年で実施可能な「たまごおとしコンテスト」のパフォーマンス課題と、ルーブリックを用いて生徒の取組を評価する際の留意点について報告した。

続いて、生物分野で、惟信高等学校教諭が「習得した知識を背景として思考力・判断力・表現力を育成する生物の授業実践」というテーマで、観察・実験を伴わないディベートのパフォーマンス課題と、生徒の主体性を重視した観察・実験のパフォーマンス課題の二つの実践を報告した。

最後に、化学分野で、鳴海高等学校教諭が「理科における『三つの視点』を踏まえた授業改善」というテーマで、金属イオンの反応に関する実験を環境問題と結びつけて考えさせるようにしたパフォーマンス課題と、評価結果の詳細な分析について報告した。

四つの報告を踏まえ、「『パフォーマンス課題とその評価』の実践に向けて」というテーマでグループ協議を行った。各学校において「理科」でパフォーマンス課題とルーブリックを用いた評価を実施する際の「課題」と「対応策」を協議し、その内容を共有することで、今後の授業改善や校内への普及・還元に生かすことを目指した。協議は1班を6～7人で構成し、9班に分かれて行った。各班のファシリテーターを研究協力委員またはセンター所員が務め、①課題の洗い出し(10分)、②対応策の検討(10分)、③提案のまとめ(15分)、④情報交流(10分)、⑤振り返り(10分)という五つのステップを踏まえて行った。

4 教育相談特別研修論文の内容紹介ビデオについて

- 愛知県立江南高等学校 重久 奈美 教諭
- 愛知県立衣台高等学校 吉野 直子 教諭
- 愛知県立知立東高等学校 加藤 珠枝 養護教諭

テーマ「若手教員の悩みに関する研究 ―中堅教員の立場から―」

現在の学校は、生徒指導の難しさや教員の年代構成の偏りなどの問題を抱えている。本研究では、そのような環境で担任業務に当たる若手教員の悩みを調査し、それを質的に検討した。

5 愛知県教育史編さん事業による刊行物の展示

本事業で刊行・完成した「本文編」「資料編」「年表」「資料目録」全巻を展示した。

6 県入選教育論文の展示

第1回から第49回までの県教育研究論文入賞者（最優秀賞と優秀賞）の論文を展示した。